

中国との医学交流から学んだもの

平馬直樹

平馬医院

私は1978年に大学医学部を卒業しました。学生の皆さんから見るとお爺さんくらいに当たりますね。卒業すぐに内科・外科の研修と並行して北里研究所東洋医学総合研究所で漢方を学び始めました。漢方医学は大塚敬節先生、矢数道明先生に師事し、古典医学と中医学は主に書物を通して学びました。当時はようやく日中の国交が回復していました。中国では文化大革命が終わり、中医学も大いに発展を迎えた時期でした。1980年代になると中国の名医が相次いで来日し、私たちを直接指導してくれました。こちらからも主に北京に短期の研修を繰り返しました。

1987年によく願いがかない中国政府の高級進修生として中医研究院の広安門病院への留学が果たせました。広安門医院では希望通り朱仁康・張作舟（皮膚科）、路志正（内科）、朴炳奎（腫瘍科）ら最高レベルの名医の指導を受け、そこでは四診合参と弁証論治の真髄に接することができ、揺るぎない学習の方向性を与えられました。

帰国後、東京臨床中医学研究会の創設により全国の中医学研究会との連携を図り、微力ながら中国との学術交流に努力しました。また、在日中医師との交流も貴重な経験で、これらのつながりがその後中医学交流会の開催を経て日本中医薬学会の設立に結実しました。

1996年に平馬医院を開業、保険診療の中で、中国と遜色ない診療ができるよう努力。たびたび訪中して学びました。全国の中医研究会と連携して、従来日本に流通していなかった重要な生薬を継続的に使えるよう努力しました。

1990年代以降、中医学は緩やかにすそ野を広げていきましたが、全国的な学術組織が欠如し、日本側に中医学分野の交流の窓口がなく、単発、個別の交流に留まっていました。

2003年から中医学の学術交流の場「中医学大交流会」を組織し、これを母体に2010年に日本中医学学会を設立、初代会長を務めています。学会は中国をはじめ世界の中医学界との交流の窓口になることを目的の一つとしています。学術総会では、毎回中国からの招待講演を設けて学んでいます。また、2011年から台湾との相互交流も深まっています。

2020年からのcovid-19の世界的パンデミックでは、国家の医療を総動員して武漢の感染を終息させ、中医学も大いに貢献しました。日本中医薬学会では、zoomを用いたweb会議によって中国でcovid-19の中医治療に当たられた中医師の経験を7回にわたって学びました。これを通して、現代の中医学の救急医療への対応力を改めて評価するとともに、『傷寒論』から始まる、中医学の感染病学の重要性を認識し、再学習する契機となりました。

中医学を实践するうえで私が心掛けていることは、継承・適合・普及・発展の 8 文字で表されます。正しい継承、現代医療への適合、人材育成と医療界・一般社会への普及を通して学術的、技術的な発展を図り、治療領域を広げ、治療効果を高めていかねばなりません。

私が次々世代の皆さんに望むことは、世界の中医学が現代医療に果たしている役割を広い視野で観察し学び、実践し、日本の状況も世界に発信していただくことです。それには継続的な世界の中医学との交流が必要で、とりわけ中国との交流が有益です。学会としても若い皆さんの医学交流を応援したいと思っています。